

## 復活の主日

2011.4.24

ヨハネ 20・1-9

復活祭おめでとうございます。

今年は、このような復活祭の挨拶を交し合うことにためらいを感じる方も多いのではないかと思います。被災地の方々のことを思うと、今も大きな苦しみの中にある方々のことをそのままにしておいて、私たちの間だけで、このような喜びの挨拶を交し合うことに、居たたまれない罪悪感を感じてしまうかもしれません。復活祭を迎えた私たちが、何故、どのような意味で、「復活祭おめでとうございます」という挨拶を交し合うのか理解できない人々にとっては、このような挨拶はつまずきを与えるかもしれません。キリスト教の信仰は、現実の社会とは関わりを持たない、持とうとしない、現実逃避に過ぎないと思われるかもしれません。

けれども、「復活祭おめでとうございます」と私たちが交し合うこの挨拶が、どのようなことを喜び合う挨拶であるのか本当に理解できれば、今のこの時点で、このような復活祭の挨拶を交し合うことに、躊躇する必要がないことが分かるはずです。むしろ、今こそ、心のありったけの力をこめて、この挨拶を交し合うことが、キリスト者としての私たちの信仰の本来の姿であることが分かるはずです。

ヨハネ福音書が語る復活の朝の出来事は、イエスの墓から始まっています。そして、その墓の中には、そこに納められているはずのイエスの遺体を見出すことが出来なかったのです。そのイエスの遺体は、あの十字架からやっとの想いで降ろされて、全ての活動が制限される安息日の前の夕暮れが迫るあわただしさの中で、これと言った用意も出来ないままに、とりあえず、そこにあった墓に納めたはずの遺体です。それが今、その墓の入り口をふさぐために立てかけておいた石が無残にも転げ落ちていて、その墓の中にはイエスの遺体は無かったのです。これが、ヨハネ福音書が記す、復活の朝の最初の出来事です。イエスの遺体が見当たらないことを弟子たちに知らせに走ったマグダラのマリアと、その知らせを聞いて墓に走った弟子たちの姿は、今も行方不明のままの肉親を探し続ける被災者の姿と、どうしても、ダブってしまいます。イエスのからだは、納められたはずの墓の中に無かったと言うだけのことだとしたら、そのことから、イエスは復活したのだと言われたとしても、そのイエスの復活とは何だと言えるのでしょうか。それにもかかわらず、ヨハネ福音書がイエスの復活を告げるために、イエスの墓にはイエスの体はなかったということから語

り始める意図はどこにあるのでしょうか。何故教会は、その最も盛大に祝うべきイエス・キリストの復活の祭日に、ヨハネ福音書のこの箇所を読むように求めているのでしょうか。

イエスの墓にはイエスの遺体がいなかったということは、この地上に生きたイエス・キリストの御生涯の最後の最後の出来事として、聖書が告げることです。そして、それは、イエスを慕って、十字架の上に死んで行かれたイエスを最後まで看取り、イエスの埋葬に立ち会った、数少ない、残されたイエスの弟子たちにとって、最後の最後に遭遇した狼狽とそれに続く絶望の経験以外の何ものでもないのです。これが、聖書が語るイエスの復活以前の、地上に残された者たちの、最後に行き着く状況であり経験です。私たちの地上の経験に基を置く、私たちの側から獲得された「私たちの信仰」は、ここに至って、その終わりを迎えざるを得ないのです。

イエスの復活を信じ、イエスの復活を祝う私たちは、聖書が語る、私たち地上に生きる者たちが、その経験によって確認せざるを得ないこの現実をしっかり受け止めなければなりません。このような現実から目を背けてはならないのです。そうでなければ、私たちの信仰の全ては、苦しみの中にある人々の心に届くことはなく、私たち自身の苦しみを支え続ける力を持つことさえ出来ないものになってしまいます。

私たちが祝うイエスの復活祭は、私たちのあらゆる経験の彼方に、神がその全能の力をもって、この私たちの世界にもたらしてくださった、神による救いを祝う祭りです。私たちは信仰によって、イエスの十字架の苦しみの彼方に、イエスの復活という、このような大きな喜びを神が用意してくださったことを祝っています。けれども、イエスの十字架の死からその復活への過ぎ越しの道は、私たちのこの世の経験によって、その経験によって得ることの出来る悟りによって、乗り越え、「過ぎこす」ことが出来る道ではありません。その道は、私たちのこの世の生のいわばどん詰まりの先に、十字架の死に極まったイエスの生涯を受け入れてくださったイエスの父なる神が開いてくださった永遠のいのちに至る「過ぎ越しの」道です。イエスはこの世の苦しみの中にある私たち全ての者のために、この「過ぎ越しの道」を開くために、十字架の死を御父のみ旨として受け入れてくださったのです。

聖書が告げるイエスの復活によって、私たちはあのイエスの十字架の苦しみが、神に通じる苦しみであったことを知るのです。誰に理解されず、むしろ多くの人々の憐憫と、敵対者たちの愚弄の中で、神にも見捨てられた者のように、十字架の上に死んだイエスの苦しみの全てが、神に通じていたことを知るのです。

イエスの復活を宣伝するという事は、イエスの死を告げ知らせるというこ

とです。イエスのあの十字架の死がイエスの復活に繋がったという聖書が告げる信仰の神秘を受け入れ、そのようにして、イエスはこの世の苦しみの中にある全ての人に福音をもたらして下さったと信じる信仰が、キリストの復活祭を祝う私たちの信仰です。

どうして、イエスの十字架の死と復活の「過ぎ越し」が、この世の苦しみの中にある私たち全ての者にとって福音であると言えるのでしょうか。私たちのこの世の生を脅かす苦しみは全て、私たちのこの世の生の営みを破壊し、この世の生の意味を奪い去って、私たちを絶望へと追い込みます。

イエスの復活は、そのような苦しみの生を生きる私たち全ての者に対する、神が身をもって示しておられる回答です。イエスの十字架の死と復活によって、私たちは、私たちが経験するこの世のあらゆる苦しみにも、意味がありうることを知ったのです。イエスがそうされたように、私たちの十字架の苦しみを神のみ旨として黙って受け止めきることが出来る時、私たち全ての者の苦しみは、他者の救いになり得ることを知ったのです。人類の救いのための貢献になりうることを知ったのです。そのような、イエスの十字架と復活において示された「福音」を信じる者たちとして、つつしんで、私たちの主イエス・キリストの復活の祝いを祝いたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高